

2015/03/12 報道関係機関と地球研との懇談会
(於: 京都烏丸コンベンションホール)

流域委員会という場づくりを通じて 地域の未来を「共に創る」

総合地球環境学研究所 研究部

加藤 久明

プロフィール (加藤久明)

- 総合地球環境学研究所 プロジェクト研究推進支援員
→PJ運用業務と研究業務の二足の草鞋
- 地球研での所属プロジェクト
「統合的水資源管理のための『水土の知』を設える」(C-09-Init)
[→通称名称:「水土の知」プロジェクト]
- 主要な活動フィールド: インドネシア (最近では主としてバリ島)
- 修士は文化情報学、博士は政策研究
→学問的基盤を構成する主成分: 社会学と経営組織論
→専門に縛られることなく、必要なことは何でも実践します
- 専門分野: 環境政策、経営組織論
- 研究テーマ
→経営組織論的手法に基づく統合的水資源管理の再検討
→地域でコントロール可能な簡易測定方法の構築

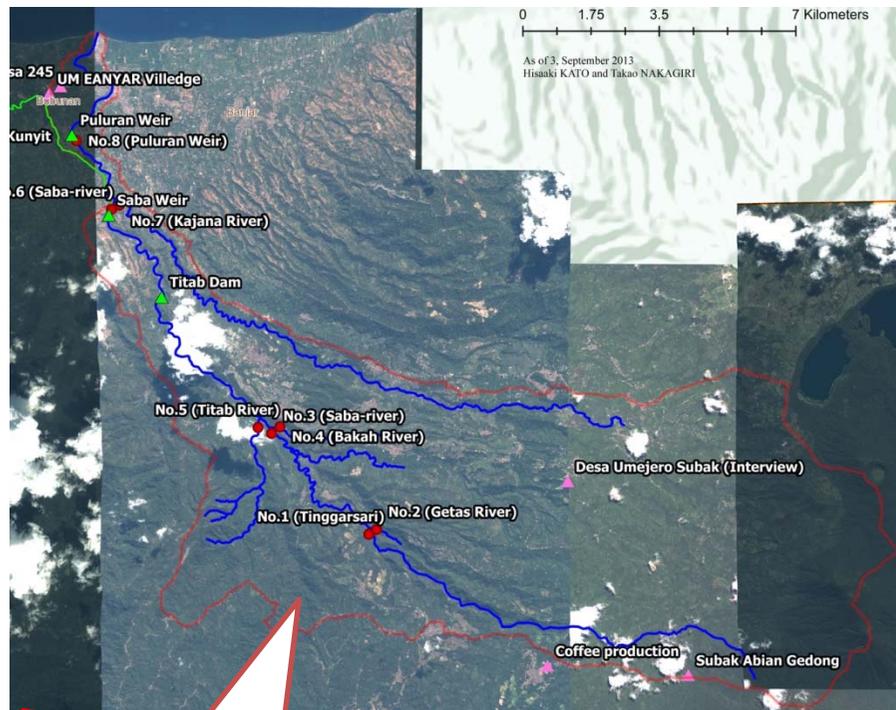


研究プロジェクトの概要

「統合的水資源管理のための「水土の知」を設える」

- プロジェクトの研究活動：
 - ①統合的水資源管理の社会実装としての「地域レベルにおける水資源管理のデザイン」をターゲットとし、
 - ②事例地域におけるステークホルダーとの協働によって望ましい水資源管理の在り方を検討する
- 消費量が大きな農業用水を中心に、4か国を主体とした事例地域(近代的な水利システムの導入時期、経済成長段階、農業へのインセンティブが個々に異なる)
 - ① Saba River Basin, Bali, Indonesia
 - ② Bili-bili District, South Sulawesi, Indonesia
 - ③ Echi-River Basin, Japan
 - ④ Seyhan River Basin, Turkey
 - ⑤ Harran Plain, Turkey
 - ⑥ Nile Valley and Delta, Egypt

報告の舞台：バリ島北部・サバ川流域



Saba River basin (128.4 km²) in Kabupatan Bulelen, Bali Province



コンパクトな流域です
(上流～下流まで35km程度)

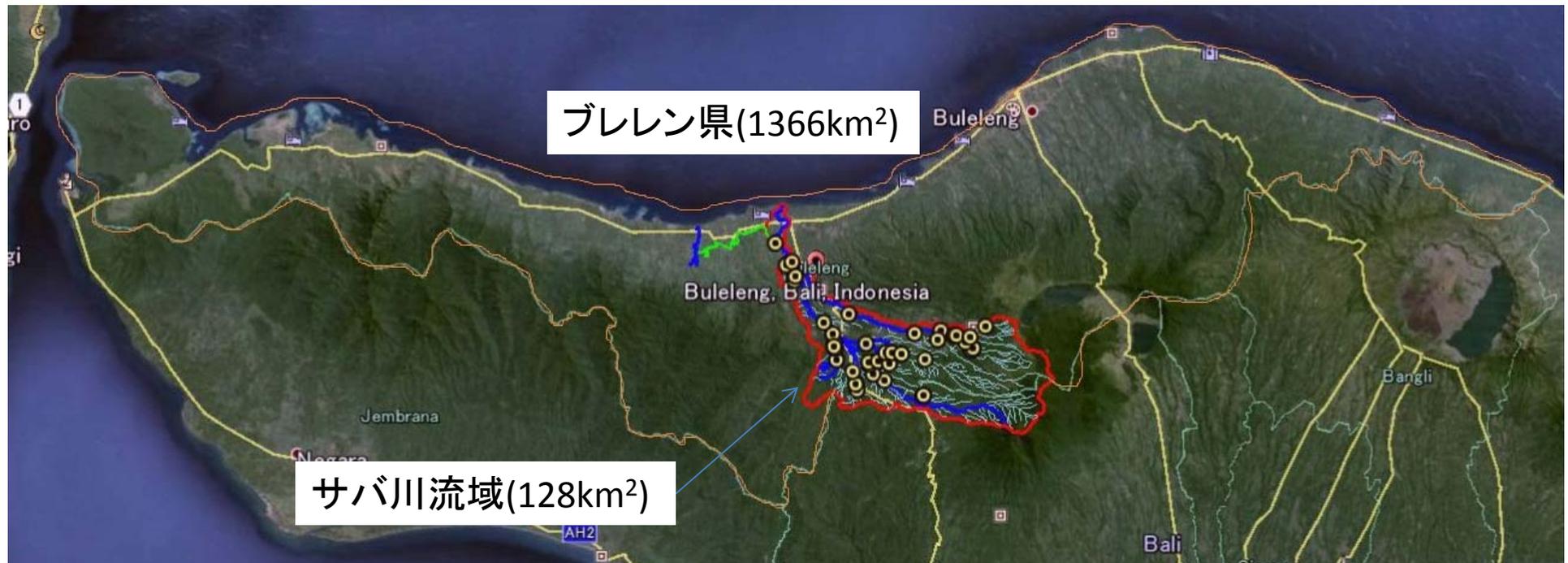
なぜ流域委員会なのか？

- 2013年から重ねてきたステイクホルダー会合
→「**地域の身の丈に合った流域委員会**」という提案と合意形成が出発点となった
- PJ開始当初(2011)から、地域と共に観測を試みつつ、信頼醸成を重ねてきた→観測から本音の話し合いへ
- 県レベル(ブレレン県)では流域委員会が存在する
→書類上は存在するが、有効な活動ができない現状
- 元々、伝統的な水利組合である「スバック」が存在
- しかし、水田耕作者(農業従事者)による水資源管理組織であるスバックでは対応しきれない問題が山積

[参考] Buleleng ForumDAS

(ブレレン流域委員会)

- 島の北斜面全体におよぶ広大なブレレン県
- 多様な利害関係者を1つの流域委員会でカバーする
→現実的に不可能という以前に無理がある
- 聴き取り調査:「スバックやNGOなどの巻き込みができない」
「行政主導であるが流域主導ではない」などの問題



何をしているのか？

「サバ川流域委員会」設立委員会による活動

「科学無しでは解けないが、科学だけでは解けない問題を共に考えていく」

これをサポートする「介入者」としての研究者によるサポート活動

- 現状：地元のスバック関係者、NGO、行政関係者、科学者などによる「サバ川流域委員会」設立委員会による準備段階にある
- 「社会と科学の共創」：「小さな活動」を積み重ねながら、地域社会と科学者の中で信頼を醸成していく試み
- 「研究者や行政が枠組みを用意し、取り込んでいくのではなく、地域に住む人々と考えていく双方向型の課題発見」
→ 行政(国)ー地域の間位置する「中間領域」としての流域委員会

間接的な介入スタイル

～地元出身の研究者を媒介した介入～

「サバ川流域委員会」設立委員会

地元関係者(スバック、NGOなど)

行政関係者(地元ならびに州都から)

地元出身の研究者
(ウダヤナ大学)

オブザーバー
(地元の運営協力者+外部のインドネシア人科学者+地球研 加藤)

地球研C-09-Initプロジェクト

地球研からの研究者

地元出身の研究者
(バリ島・ウダヤナ大)

インドネシアの共同研究者
(ジャワ島・ボゴール農科大学)

研究者は脇役に徹する
(発言が与える影響力を考慮)

議論内容の検討
意見提案の作成

象徴空間と現実の狭間で

～変わらない社会など存在しない～

- 神秘的な象徴空間として描かれるイメージ
- 研究PJを開始した当初、外部の方からいただいた、「今さらバリなんて...」、「問題なんて無い」といったコメント
- だが、そこには人が生きているがゆえに、問題も起きる
 - A) 河川に不法投棄されるゴミ問題
 - B) 若者の農業離れ、農村部の高齢化問題
 - C) 水田からホテルや宅地への土地転用
 - D) スバックと他の生業従事者との対立
 - E) スバック間の確執や時に起こる衝突など...etc
- 「土地転用」は特に深刻
 - ➔ 複雑な水と人の繋がりを大きく変える変化だが、伝統的なスバックの仕組みはこの変化を止める術を持たない

[参考] 水田からの土地転用

- 近年、特に目立つ水田などの農地から住宅・ホテルなどへの転用

The image displays three real estate advertisements for land conversion projects in Indonesia. The leftmost ad is for 'GRAHA ASRI PANTAI LOKAPALSA TIPE 45', featuring a house and a car, with a 'MASTER PLAN' diagram and contact information for 'PAK KADEK'. The middle ad is for 'Segera Dibangun' (Ready to Build) 'TIPE 45' housing, highlighting 'Lokasi Strategis' (Strategic Location) and listing nearby facilities like 'SMP N 1, SD N 1', 'Puskesmas', and 'Terminal'. The rightmost ad is for 'DIJUAL TANAH KAPLING SIAP BANGUN' (Land for Sale, Ready to Build), showing a site plan with various lot sizes and contact numbers.

サバ川下流域などでよく見かける分譲住宅広告(水田からの転用)
[加藤撮影: 2014年11月]

[参考] 最近の開発事例

下流から車で1時間以内
標高約250m



2012年9月1日撮影

住宅開発のために1haほどの
水田を転用している最中
(4m幅の道の左右に家を建てる)



2015年2月19日撮影

[参考] 皆が合意するゴミ問題...

ゴミが溜まると、川や用水路に流してしまうことがよくある。
このため、下流や河口にゴミが溜まる



河川や用水路の周辺にもゴミが放置されることが多くある

地域の未来を考える場としての 流域委員会(ForumDAS)

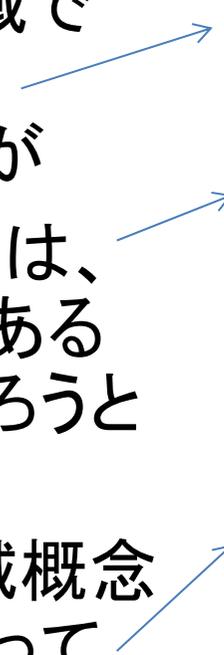
- 水資源管理に特化してきたスバックでは対応しきれない地域の様々な課題を、セクターを超えて考える
- インドネシア語では、“ForumDAS”
(DAS=流域)
- 地域の協力を得て、組織作りのための役割と機能、組織構造などの議論を展開中



議論を重ねる中で見えてきたこと

再認識の対象	議論を経て発生した再認識プロセスなど
ステイクホルダー	<ul style="list-style-type: none">自分たちが向き合う流域というものに関係する利害関係者としての Village, Local Industry, Government という「セクターに対する再認識」 →組織内における情報共有の際に強調されていた
DAS (Watershed)	<ul style="list-style-type: none">対象とした Subak (農家) の大半は、行政関係者と異なり、DAS に関する認知構造を有していなかったしかし、会合で情報を得たことにより主観的な認知構造と DAS に関するリンクを作ることが容易に可能だった →背景: 自分たちの Subak Community System だけでなく、日常で得ていた支流への理解があったため、概念として理解するのは難しくなかった(研究者が近代的水管理の文脈で「流域」を自明のものとしすぎていることとのギャップ)
Subak	<ul style="list-style-type: none">自分たちが住んでいるテリトリーとして、自分たちのスバックのみを考えてきたが、会合においてホテルやゴミの問題などが見えてきたため、他のスバックを再認識するようになった →この再認識プロセスは、中流・下流で強く顕在化していた
議論に参加した人の情報共有とその方向性	<ul style="list-style-type: none">対象者は総じて情報共有を実施しているが、指向性に違いがあるA) 行政関係者: 基本的に上長の代理として出席しているため、全てにおいて業務報告として情報を上長に共有している(↑)B) Subak 関係者: 35日ごとに行われる定期会合などにおいて、構成員に得た情報、自分の経験などを共有している(↓)C) ブレレン流域委員会: 流域委員会会合において、情報を共有(→)

[参考] 現地と研究者の「流域」に関する 認識ギャップ

- 研究者の認識
 - A) ForumDASを小流域で再編成するというアイデアで挑んだが
 - B) 流域概念については、スバックの文化があるので理解できるだろうという先入観
 - C) 近代水管理の流域概念が自明のものとなっていたという認知構造上の問題
 - 現地の人々の認識
 - A) そもそも、“DAS(流域)”とは何ぞや?というレベル
 - B) DASの意味は、自分たちがスバックで培ってきた組織文化があるので、容易に理解できる
 - C) 書類だけのDASという概念が理解できたことで、自分たちの周辺を理解する上で世界観が広がった
- 

議論を重ねて見えてきたこと

- 研究プロジェクトが地域との信頼を醸成していくと、「共に考える」というスタイルづくりの難しさが見えてきた
→ 専門家としての「科学者」の立ち位置
- 多くの地域計画などの文脈で、「答えを与える者」としての専門家の役割があったことは事実
- そして、この流域の人々も科学者が結論を用意していると期待していた
- そうではなく、科学者も知見を整理しながら、一人の利害関係者として共に考えていく、あらゆる問題解決の基本は地域の人々から来るものだとすることを理解してもらう
- 「言うは易し行うは難し」→この点で苦勞をした

「人々の声を拾う」ということへの意識

- 議論の中で、「流域委員会のトップや理事会メンバーは行政の外から呼ぶべき」という意見が行政関係者から出てきたことに地元関係者・科学者が驚く
(しかも、最も保守的と思われた公共事業省のメンバー)
- ユドヨノ政権(2004-2014)において始まった地方分権
- ドラスティックな社会経済の変化の中で「地方が自らの問題に自ら考えて取り組む」ということに取り組まざるを得ない人々が持つ意識の高さを考えさせられる

地域への介入者としての 研究プロジェクトが果たすべき責任

- **“Local people’s idea oriented”**
地域行政の代弁者ではなく、地域の人々の声を拾う
- 「組織作り」をすることは、人々への最終的な回答と
ならない→この点が従来の開発系PJと異なる
- 人々が見出した課題、将来像に向けた「行動」をど
のように具体化するか？
 - 地域の人々との信頼醸成を果たしながら、小さな
行動を積み重ねていくことが必要
 - 同時に、そこで得た信頼のプロセスを分析すること
こそが、地域への介入者としての研究PJが果たす
社会的責任でもある

終わりに

- バリをめぐる歴史的背景から見えてきたこと
 - A) 神秘的な側面が強調されることが多いのだが...
 - B) かつての植民地時代、独立後の国民国家システムの中で、既に1920年代から普及した貨幣経済をベースとした資本主義が時間と空間を再編し続けてきていた
 - C) グローバル化の中で、地域も変わっていくことは不可避であり、バリもスバックという伝統を切り崩しながら、これらを再定義し続けている
 - D) 様々な時代の局面を経て、バリも含めた地域という共同体は、新しいアイデンティティを求め、新しい時空間において規範と道徳を再定義せざるをえない
 - E) 都市以外の地域を考える時に、そのような視点が不可欠

ご清聴、ありがとうございました

